

# 数 学

## 1 構 成 員

	平成 14 年 3 月 31 日現在
教授	1 人
助教授	0 人
講師（うち病院籍）	0 人（ 0 人）
助手（うち病院籍）	0 人（ 0 人）
医員	0 人
研修医	0 人
特別研究員	0 人
大学院学生（うち他講座から）	0 人（ 0 人）
研究生	0 人
外国人客員研究員	0 人
技官（教務職員を含む）	0 人
その他（技術補佐員等）	0 人
合 計	1 人

## 2 教官の異動状況

野田 明男（教授）（H3.8.1 現職）

## 3 研究業績

数字は小数 2 位まで。

	平成 13 年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	1 編（1 編）
そのインパクトファクターの合計	0
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	0 編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	0 編（0 編）
そのインパクトファクターの合計	0
(4) 著書数（うち邦文のもの）	0 編（0 編）
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	0 編（0 編）
そのインパクトファクターの合計	0
(6) 国際学会発表数	0 編

### (1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 野田明男（2002）カード・ゲームの数理ノートⅡ；「神経衰弱」における戦略について。

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共

同研究)

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

(2) 論文形式のプロシーディングズ

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

(3) 総 説

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

(5) 症例報告

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

(6) 国際学会発表

#### 4 特許等の出願状況

	平成 13 年度
特許取得数（出願中含む）	0 件

#### 5 医学研究費取得状況

	平成 13 年度
(1) 文部科学省科学研究費	0 件 ( 万円)
(2) 厚生科学研究費	0 件 ( 万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0 件 ( 万円)
(4) 財団助成金	0 件 ( 万円)
(5) 受託研究または共同研究	0 件 ( 万円)
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	1 件 ( 30 万円)

#### 6 特定研究などの大型プロジェクトの代表，総括

#### 7 学会活動

	平成 13 年度
(1) 特別講演・招待講演回数	0 件
(2) 国際・国内シンポジウム発表数	0 件
(3) 学会座長回数	0 件
(4) 学会開催回数	0 件
(5) 学会役員等回数	0 件

#### 8 学術雑誌の編集への貢献

	平成 13 年度
学術雑誌編集数	0 件

#### 9 共同研究の実施状況

	平成 13 年度
(1) 国際共同研究	0 件
(2) 国内共同研究	0 件
(3) 学内共同研究	0 件

#### 10 産学共同研究

	平成 13 年度
産学共同研究	0 件

#### 11 受賞（学会賞等）

## 12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

現職について10年余、担当する授業や入試において出会うさまざまな数学の「問題」を考察するという経験を積み重ねてきた。そして、運をはらむゲームとその最適戦略の研究に興味をもつに至った。特にこの2・3年は、子供向けのカード・ゲームに過ぎぬ「神経衰弱」に焦点をあて、その数理の解明に取り組んでいる。偶然に数が一致するという運の要素に加えて、プレイヤーの記憶能力がこのゲームで獲得する得点を左右する。先手・後手の有利さは如何ほどか、というゲームにおける通常の研究課題の他に、プレイヤーの記憶能力に関する条件の違いがどのように得点の期待値に反映されるか。各プレイヤーが採用する戦略に応じて、連立の定差方程式をたて、解の漸近挙動を解明する数学的アプローチをとって、かなりの成果をあげることができるものと期待している。

(野田明男)

## 13 この期間中の特筆すべき業績、新技術の開発

## 14 研究の独創性、国際性、継続性、応用性

## 15 新聞、雑誌等による報道